

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 木更津工業高等専門学校 点検・評価委員会

(責任者名) 湯谷 賢太郎

(役職名) 副校長(総務担当)

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況		本教育プログラムを構成する科目のうち、「AI実践」を除くすべての科目は必修科目として全学生が履修する。「AI実践」については、4月にMicrosoft Teamsを通じて履修申請に関する案内が配信され、Microsoft Formsにより申請を受け付ける体制を整えている。申請状況はFormsの回答結果や教務委員会資料により確認可能である。出欠状況は電子出席システム等で把握でき、修得状況についてはWebClassシステムを用いて課題の取り組み状況や提出状況を確認できる仕組みを構築している。
学修成果		月1回の定例学科会議にて本教育プログラムの科目における学生の理解度や学習状況について情報を共有し、学習支援が必要な学生への対応を行っている。また、各学期末に開催される修了認定会議にて成績の評価を行っており、一貫した基準で学生の科目修得を決定している。
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度		本教育プログラム受講者全員に対して授業アンケートを実施しており、科目担当教員が学生の理解度を分析するとともに教育の改善を行っている。また、各教員は全ての授業を実施した後に事後シラバスと呼ばれる文書を作成することとなり、学生のアンケートや成績を再度分析して次年度への授業改善につながるような体制が整備されている。更に、教員2名以上のグループで相互点検及び授業改善のための意見交換を実施し、点検・評価委員会に報告することとなっている。このように、教員自身、教員間、そして委員会組織として学生の理解度の把握や教育の改善が行われている。
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度		本教育プログラムでは、受講者全員を対象に授業アンケートを実施し、後輩学生や他学生への推奨意向を確認している。得られた結果は、教務委員が本プログラムの履修促進や質問対応、学生への指導・支援などのサポートに活用している。
全学的な履修者数、履修率向上 に向けた計画の達成・進捗状況		プログラムの中で唯一の選択科目は「AI実践」(5年後期)であり、高い履修率を確保するため、教務委員がプログラムに関する質問受付や学生指導・支援などのサポートを担い、履修促進を図っている。令和8年度入学生からは新たなカリキュラムが導入される予定であり、それに伴いプログラム構成科目も変更となる予定である。この新カリキュラムで学ぶ令和12年度卒業生については、プログラムを必修科目のみで構成できるよう検討を進めており、履修率及び修了者は100%近くとなる見込みである。

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	点検・評価委員会では、卒業・修了後おおむね5年を経過した者を対象にアンケートを実施しており、その中に本教育プログラム修了者の進路や活躍状況を把握するための項目を組み込む。また、企業や大学教員に対してもアンケートを実施していることから、同様の項目を設け、修了者に対する評価を収集する。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	企業の管理職、大学教員、副市長、商工会議所役員、中学校校長などで構成される運営諮問会議において、本校の教育・研究活動が社会の要請に適合しているかを調査している。本教育プログラムの内容に関する評価については、2年に1度開催される当該運営諮問会議において意見を収集し、数理・データサイエンス・AI教育の改善に活用する。
	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	1年次に開講する「情報リテラシー」などの情報関連科目では、モデルカリキュラム・リテラシーレベルの導入部分に準じた内容を扱い、時事やトレンドなど社会の実例を通じてAI等の活用事例を紹介している。これにより、数理・データサイエンス・AI技術の実際の利用場面を理解でき、学生の好奇心を喚起するとともに学習意欲の向上につなげている。
	内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	本校では、毎年、全学生を対象に授業アンケートを実施し、授業内容や進め方、説明方法、資料の分かりやすさ等について、中間試験期間中に意見を収集している。その結果を踏まえ、以降の授業運営に反映している。さらに、各教員は全授業終了後に「事後シラバス」を作成し、アンケート結果や成績を再度分析して次年度の授業改善に活用している。また、教員2名以上によるグループで授業や試験内容の相互点検と意見交換を行い、その結果を点検・評価委員会に報告する体制も整備している。このように、教員個人、教員間、さらには委員会組織のレベルで、学生の理解度把握と教育改善に取り組んでいる。